



みみん

【題字】谷川俊太郎さん



せんだい・みやぎNPOセンターニュースレター“みんみん”は、あらゆる組織が社会課題解決をキーワードに出会うきっかけづくりと、活動を発信をすることから、新しい風を起こしていきたいと願っています。

目次

P 2	『クロスセクター』被災地へ現地から継続的支援に取り組む「株デンソー」
P 3	みやぎNPO夢ファンド総括報告会
P 4	せんだい・みやぎNPOセンター事業報告
P 6	新入職員紹介
P 7	『ライブラリレー』特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク
P 8	新規会員・継続会員、編集後記 お知らせ、連絡先等



MY FAVORITE お気に入り小物拝見

当センター初の留学生非常勤職員である中国出身の唐圓圓(トウエンエン)さん。お気に入りの小物は、世界遺産の「故宮博物院(紫禁城)」(北京市)で購入した鮮やかな赤紫色の「小銭入れ」。生地には花模様のほか、明・清時代に使用されていた昔の文字が刺繍されているのが特徴的です。愛国精神を大切にしながら、グローバルな視点で仙台の市民活動を支援していきます。

クロスセクター それぞれのリソースを活かし、 これからの地域を創造しよう。

これからの地域形成に不可欠な存在といわれる、
NPO、企業、行政、大学等の各セクター（部門）が考える地域づくりとは？
地域づくりプロジェクトのご紹介や、取り組みをしている方にお話を伺います。

今回は

株式会社デンソー

東日本大震災から3年が過ぎ、フェーズの変化とともに被災地への支援の在り方を模索する企業。その中で、愛知県刈谷市に本社を置く「株式会社デンソー」が遠い場所からできる支援を考え、取り組まれています。震災以降当センターとのつながりとなったデンソーさんの今までの取り組みとこれからについてご紹介します。

被災地へ現地から継続的支援に取り組む(株)デンソー

震災後からの動き

2011年3月の東日本大震災、この大きな災害後には県外、国外から多くの支援の手があったことは記憶に残っていることです。その当時、株式会社デンソー（以下(株)デンソー）も早々に様々な生活支援物資を集め、東北に入りました。福島県田村市にグループ会社である株式会社デンソー東日本の工場があり、建屋を避難所として提供し、被災者への支援を始めました。また、本社内ではボランティアを募り石巻市で支援ができないかと考え、ボランティアバスを16回にわたり派遣し、のべ700人の社員が被災

地での活動に取り組みました。

また、当センターへも情報収集に来られ、地域で活動する福祉団体や子供支援のNPOへ車や寄付を行ったことや、刈谷市内の放置自転車を修理し岩手県と宮城県へ380台の自転車を提供するなど様々なカタチで応援をしていただきました。その相談窓口となったことから当センターと(株)デンソーさんとの継続したつながりができました。

遠方からの直接支援の限界

ボランティア派遣や物資支援もある程度の時期までであること、距離的に遠い企業でも、もっと何かできることはないかと考える総務部社会貢献推進室の杉浦龍次課長。

社会貢献活動の一環として、以下のようなことも行っています。①社員有志から毎月の給与・賞与の100円/口を天引きし積み立てたお金は地域団体や社員企画への寄付、自然災害義援金などに活用をする「デンソーグループはあとふる基金②社員一

人ひとりの社会貢献活動にポイントを発行し、ためたポイントが被災地の福祉施設の授産商品と交換できる工夫をした「はあとふるポイント」③週1回全食堂で提供の指定メニューを喫食すると、1食ごとに10円がはあとふる基金に寄付、④東日本大震災被災児支援に活用できる「はあとふるメニュー」など、被災地へ行かなくても企業として社員としてできる支援を行っています。

被災地支援とNPOとの関わりとは

「今回の震災支援では、被災地の中間支援組織の存在がとても有難いものと認識しています。」と、杉浦課長。これからの企業とNPOについては、以下のように話してくださいました。地域の状況などが解らない企業としては、その地域の状況や活動する団体の情報を持ちあわせ、団体を紹介していただいたことがあってこそ、その現場に入ることや団体の支援ができました。

今後は、福島、岩手などにも支援を広げ、団体の生の声を聴き、ボランティアとワークショップを行いながら愛知からできることを考え、団体の支援や協力を愛知から行う予定です。

震災から3年が過ぎ、当社では復興支援を10年は行うつもりです。被災地の状況を確認するツアーも行う予定ですが、企業同士がそれぞれの取り組みを知る機会や現地NPOとの情報交換が出来る場を創っていただくことを期待しています。細い糸でも何本も重なれば太いロープになります。セクター同士がこれらからもっと繋がりあうことがこれから必要だと考えています。

(大町事務局 伊藤 浩子)

みやぎNPO夢ファンド総括報告会開催

※「みやぎNPO夢ファンド」は、宮城県からの拠出金と市民からの寄附を原資として運用されている「官民協働型」のNPO支援基金です。

2014年3月8日（土）にみやぎNPOプラザ交流サロンにて、「みやぎNPO夢ファンド総括報告会」を開催しました。今年度で10年目を迎えたみやぎNPO夢ファンド。この10年間の総括する報告会では、最終年度の助成団体の報告と、「10年の取り組みと成果報告」と「助成してきた意義」の報告、そして最後にパネルディスカッション「市民活動を支えるものとその役割」を開催しました。パネルディスカッションでは、過去に助成を受けた団体をパネリストにお迎えし、みやぎNPO夢ファンドが担ってきた役割やその価値をお伝えしました。

■平成25年度助成団体による報告

第一部では、今年度に助成を受けた各団体より、今年1年間の活動内容の振り返りとその成果、今後の目標等を発表して頂きました。「雇用創出につなげることができた」、「今回の助成金で、活動の実績をまとめる記録本を作成した」等、助成金を活用して様々なことを成し遂げています。

平成25年度助成団体（計13団体）

■ステップアップ支援プログラム（3団体）

（一社）ISHINOMAKI2.0／NPO法人みやぎ身体障害者サポートクラブ／NPO法人笑顔のお手伝い

■組織開発プログラム（4団体）

NPO法人Switch／すんぶちよ／東北HIVコミュニケーションズ／ARTS for HOPE

■スタートアップ支援プログラム（6団体）

（一社）KITT／ココロのびのび★プラネット／（一社）とほく／NPO法人プレアツリズム／NPO法人コ・クリエーションセンター／NPO法人東北の造形作家を支援する会

以下、助成団体からの成果報告（抜粋）

- ・新たな事業への挑戦として、自然素材を使ったワークショップを開催できた。
- ・就業者が30人から45人に増加した。
- ・会報を配布できたことによって団体の情報発信に力を入れることができ、講座依頼が増えた。
- ・様々な農作物を栽培、収穫、委託販売した結果、販売総額が増えた。
- ・新たなコミュニティができてきた。
- ・能力発揮者の促進をし、職業選択の幅が出来た。

新たな事業への挑戦、雇用創出、情報発信、他機関との連携など、

夢ファンドがそれぞれの想いを実現するための一助となったことが確認できました。また、今後も継続していく事業やこれからの目標を発表する団体もあり、各団体



が飛躍していくことが期待できる報告会となりました。

■『10年の取り組みと成果報告』と『助成してきた意義について』の報告

みやぎ夢ファンドが設立されて10年、これまで延べ119団体に、総額約4,800万円を助成しました。第二部では、当センター常務理事兼事務局長の伊藤浩子より、夢ファンドの設立経緯や助成団体がこのファンドで成長した事例などを報告しました。このファンドはNPOや市民活動団体が地域の中で、課題解決に向けて取り組むための役割を後押ししたと共に、資金支援だけではない価値を育てたものであったことを伝えました。

その後、宮城県環境生活部協働参画社会推進課課長の佐藤謙一さんより選り出してきた例として、「震災があった状況下ではNPOなくして被災地支援は回らない。夢ファンドはNPOの基盤をつくる一助になったと感じている」と、このファンドの重要性について振り返るコメントをいただきました。

■パネルディスカッション『市民活動を支えるものとその役割』

最後のパネルディスカッションでは、過去に助成を受けた「子ども虐待防止ネットワーク・みやぎ」事務局長の鈴木俊博さん、「NPO法人World Open Heart」代表の阿部恭子さん、「NPO法人仙台夜まわりグループ」理事長の今井誠二さんをパネリストにお迎えし、助成を得たことによる団体の成長とファンドの役割や価値についてそれぞれ伺いました。

「市民活動を支えるものとして大切なものは何か」という質問では、鈴木さんは「人がつながっていくこと」、阿部さんは「誰のための活動かをぶらさないこと」、今井さん



からは「当事者性で他人事ではないこと」と話されました。また、運用委員の方々からも、「多くの機関が連携した有機的なつながりは、夢ファンドが終了しても続いていく。これからも末永く活動を続けて欲しい」とエールを頂きました。また、高浦委員長からは、「夢ファンドはNPOが育つ土壌を作ることに寄与でき、感慨深く思います。今後、小規模なものでも構わないので、第2弾となるようなファンドが創設されることを希望しています」という言葉で締めくくって頂きました。

今年度で夢ファンドが終了することで市民活動が終わってしまうのではなく、市民活動は地域の中で必要なものであり、世の中の課題は何なのか、どのような支援が必要なのかを日々考えることの必要性を、参加者とともに確認した場となりました。

（大町事務局 遠藤孝志）

企業と被災地中間支援組織とのダイアログ実施報告

2月25日(火)、いわて・みやぎ・ふくしまの3県連携復興センター(以下3れんぶく)の合同企画として、被災地支援に取り組まれている企業の皆様との意見交換会を実施しました。東日本大震災発災から4年目を迎えるにあたり、NPO/NGO、そして企業はこれからどのような役割を担う必要があるかがテーマです。会の前半に、3県連携復興センターからこれまでの3年間とこれからの取組について報告を行い、後半に意見交換を行いました。

■実施概要

日時:2014年2月25日(火) 14:00~16:30

会場:3×3 Labo(東京・丸の内 富士ビル3F)

参加人数:企業側 24社/31名、被災地中間支援組織

関係者:9団体/18名

※被災地中間支援組織関係者に報道機関、オブザーブ参加、運営事務局は含まない。

■3れんぶく事務局長からの報告

3れんぶくそれぞれの事務局長より、団体の3年間の活動内容と4年目を迎えるに当たっての活動の方向性や課題について報告を行いました。みやぎ連携復興センターからは事務局長の石塚が報告を行い、成果として市民・行政・NPOなどのクロスセクターによる対話の場が創れたこと、今後の課題として人材・資金・ノウハウの不足が考えられるということを参加者の皆様に伝えました。



■意見交換

企業の皆様に複数のグループに分かれて頂き、各グループに被災地中間支援組織関係者が加わって意見交換を実施しました。まずは自己紹介も兼ねて自社で実施している復興支援活動について共有して頂き、その後グループごとに設定したテーマに沿って意見が交わされました。参加者からは「被災地ならではのビジネスとは何か?」「課題が見えにくくなっている」「支援ではなく本業を活かした協働へ」といった意見が出され、今後の支援のあり方について示唆に富んだ場となりました。

■被災地と企業との持続的な関係構築に向けて

終了後に実施したアンケートには定期的な意見交換会の開催を希望する声が多く寄せられ、復興へ継続的に関わっていくという企業の方々の意思を感じることが出来ました。これからも企業の皆様との意見交換の場を作ると同時に、被災地と企業が持続的に繋がるお手伝いをして参ります。

(みやぎ連携復興センター 高橋智誓)

災害復興支援フォーラム「被災地の回復力を高める支援」

3月5日(水)公益財団法人プラン・ジャパンとの共催で災害復興支援フォーラムを開催しました。世界各地の大規模災害を復興過程で検証し、地域コミュニティなど人間関係の豊かさが復興に果たす役割を提起しているパデュー大学政治学部准教授のダニエル・アルドリッチ氏を講師に迎え、地域と行政の協働と市民社会ネットワークの充実度が被災地域と人々の回復力へ及ぼす影響力に焦点をあて、私たちができることについて考えました。

■基調講演

「大災害後の回復力を高めるために」

災害後、発生する問題の多くは個人では解決することのできない共同での対処が必要。被災地での調査では、地域コミュニティの広さ、人間関係の豊かさが災害復興に果たす効果は大きいとアルドリッチ氏は話していました。

個々の人や地域でのひとのつながりを密接にすることに加えて、市民の動きに行政や政府を巻き込むことの重要性と地域住民の力とNPO/NGOなどの活動を有効活用するソーシャル・キャピタル(市民力)の向上がレジリエンス(回復力)の強化につながり、市民力を高める事が本当の復興、防災にとって効果的であることを実証的な研究から語っていました。

■パネルディスカッション

せんだい・みやぎNPOセンター理事、東北大学大学院准教授の西出優子さんの司会で震災後、住民主体の復興まちづくりを支援する都市デザインワークス代表理事である、榊原進氏、外資系営業マンから震災後、ソーシャルビジネスで被災地を支援するOFFICE HIRANO代表である、平野真樹氏、発災後、被災地に入り東日本大震災支援対策室長として支援活動を行ってきたプラン・ジャパン 三絵氏をパネラーにお迎えし、それぞれの支援活動を事例を交えて報告し被災者と地域にとって必要な復興について話して頂きました。榊原氏は南蒲生地区で住民が主役になるまちづくり支援を報告。平野氏は仲間たちでチームを立ち上げ行ってきたボランティア活動からつながった被災地生産者の支援を継続、レストランオープンまでの継続と繋がりを報告。三絵氏は国際的な緊急支援のアプローチと実際の支援活動事例を紹介し、ケア宮城と被災地で行った心のケア支援をNGOや行政との連携の大切さを報告しました。会場からは被災地で活動する登壇者の生の声を聞いて「今からでも何ができるか考えたい」と感想がありました。

せんだい・みやぎNPOセンターでは、これからも被災地で活動する団体を支援し、市民と復興を考える場を作って参ります。

(大町事務局 三浦圭一)

始動!故加藤哲夫氏メモリアル事業 第1弾

東日本大震災から3年が過ぎ、震災復興支援も新たな段階に入るものと思われます。そうしたことも踏まえ、『東日本大震災後のNPO運営支援ワークショップと関連資料のデジタルアーカイブ化』プロジェクトを、日本財団の助成を待って、この春に始動いたしました。

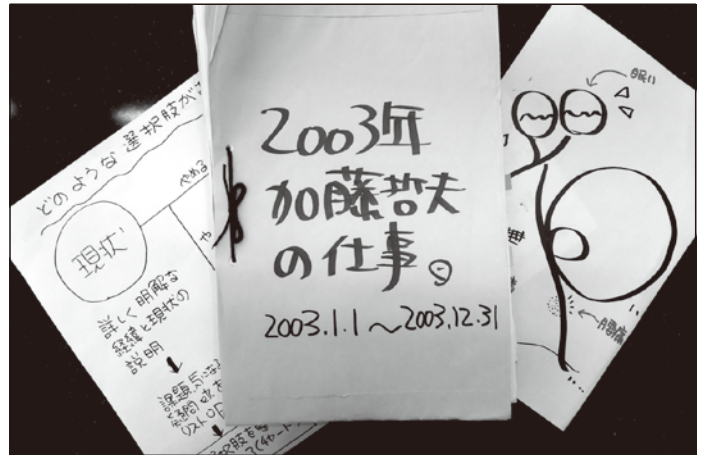
この事業は、1)故加藤哲夫元代表理事の残した直筆メモ等の未公開資料を、デジタルアーカイブウェブページを通して、市民活動や地域活動に関わる人誰もが、いつでも閲覧できる状態にすること、2)故加藤哲夫元代表理事の著書、および上記アーカイブ資料を活用し、シンポジウムやブックトークを開催して、被災地にある課題解決につなぐことを目的とします。

WEBページのなかでは、何名かの皆様に、加藤氏の資料の中から『おすすめのコンテンツ』を選んでいただき、ご紹介とコメントをいただくことを考えています。また、みなさまのお手元にある加藤氏資料(手書きメッセージや映像等)がありましたら、ぜひご提供いただきたいと考えております。

故加藤哲夫元代表理事の資料は、東日本大震災時にデスク周辺にあったものを、スタッフおよび関係者で整理して保存に努め

てきました。とはいえ、その量は膨大であり、2013年7月の当センターの事務所移転(4F→7F)を契機に、資料の整理作業を行う運びとなりました。以下に、資料分類作業時に出てきた加藤哲夫氏の資料の一部を掲載させていただきます。尚、5月14日(水)に当事業のキックオフイベント「加藤氏資料の活用に関する事業構想アイデアソン」を開催します。

(大町事務局 佐々木秀之)



市民活動団体が知っておきたい「条例を学ぶ」勉強会

宮城県、仙台市の「市民活動」条例制定後、約15年を経過し、改めて「民間非営利活動」や「市民協働の取り組み」をより深め、充実を図るため、条例を見直す機運が高まっています。当センターでは、市民主体のまちづくりを推進する観点から、条例見直しに積極的に関わるべきと考え、市民活動に取り組む方々に加え、行政関係者や議員にもお呼び掛けし、2回にわたり勉強会を開催しました。

■第1回 課題や論点の提示と意見交換

開催日: 平成25年12月17日(火)

講師: 新川達郎氏

(同志社大学教授/せんだい・みやぎNPOセンター理事)

テーマ: 市民活動についての条例を考える

- ・市民活動の促進、支援の仕組みと法的環境
- ・条例を定める意味、市民活動条例の基本的課題、ルール化する目的
- ・宮城県、仙台市の現行条例の課題

講師: 紅邑晶子氏(せんだい・みやぎNPOセンター代表理事)、内藤聡崇氏(東北大学大学院)

テーマ: 他都市の条例との比較

条例内容の独自性、多様性と共通性

講師: 平井俊之氏(せんだい・みやぎNPOセンター専務理事)

テーマ: 市民活動と条例の関係について

「市民協働」の条例化の意義と課題

■第2回 県・市の取り組み状況の報告と意見交換

開催日: 平成26年2月17日(月)開催

報告者: 松川真也(仙台市民協働推進課長)

遊佐美由紀(宮城県議会議員)

■論点の整理

研究会での討議を通じ、論点がかなり明確になりました。市民活動、市民協働を条例化することは、市民とまちづくりの関わりについて、市民を代表する議会の決定を経て法的に整理することです。一部の関係者の議論に止まることなく、市民全体の参加と理解が不可欠です。プロセスを大事にし、議論を尽くすこと、そのために当センターも更に取り組みを進めていきます。

最後に、改めて主な論点を列挙します。

①これまでの市民活動、市民協働の総括

②条例化の意義、メリット・デメリット

③現行条例の評価

④条例改正内容の留意点

- ・わかりやすい言葉での明確な理念や定義
- ・担い手の役割と責任
- ・可視化の仕組み(情報開示と説明責任)
- ・費用負担のあり方(財源、ファンド)
- ・評価の仕組み

(せんだい・みやぎNPOセンター専務理事/平井俊之)

新スタッフ紹介

新田 裕一郎(ニッタ ユウイチロウ)

勤務地:仙台市市民活動サポートセンター

こんにちは。新田裕一郎です。普段は東北大学に通っています。自分は普段学生団体としてサポセンを利用して、サポセンのことを明るくて雰囲気の良い職場だと常々思っていました。実際に働いてみて、雰囲気がいいだけでなく自分を高められる職場だと日々実感しています。仙台サポセンの業務を通じてまちづくりについて学び、将来に生かしていけたらなと思っています。

竹樋 秀康(タケヒ ヒデヤス)

勤務地:仙台市市民活動サポートセンター

昨年23年ぶりに仙台に戻りました。以前は「ものづくり」の分野に従事しておりましたが、「まちづくり」に轉身したいと思い、北海道で観光業に4年間関わり、昨年末、東北芸工大仙台スクールで学生活動をしながらアート団体の一員として活動しておりました。初々しさに欠ける新人ですが^^; その分の経験を十分に活かせる様、頑張ります。

廣田 明子(ヒロタ アキコ)

勤務地:仙台市市民活動サポートセンター

はじめまして、右も左もわからないままNPOの世界へ飛び込んだ廣田明子と申します。興味は持ちつつも日常の中で聞きなれない言葉であったNPO。その活動の中で何が必要なのか、お手伝いさせて頂ける部分はどこなのか。一人ひとりのお話と教を乞いながら皆さんと共に歩んでいきたいと思ひます。宜しくお願いします。

唐 圓圓(トウ エンエン)

勤務地:仙台市市民活動サポートセンター

東北大学経済学部修士1年の唐圓圓と申します。中国からの留学生です。専攻においてNPOについて学び、学校のボランティア活動を通じて、だんだんと市民活動の取り組みなどに興味を持つてきました。まちづくりや地域社会の構築、災害復興に関することを勉強しています。今後もサポセンで頑張っていきます。

Beny's Note

代表理事 紅邑晶子

ありがとうキャラバン ご支援いただいた方々への報告と交流の旅 ～別府・大分・倉敷～

2月26日・27日・28日の3日間、25日に東京で開催した企業とのダイアログに引き続いて、「ありがとうキャラバン」を実施しました。この企画は、石橋財団より3県の連携復興センター事業のために助成いただいた資金をベースに行ったもので、行き先は当センターが震災後に寄付金を頂戴した、ふいごプロジェクトの方々がいらっしゃる地域です。

26日は、別府にてハットウ・オンパクの野上さんの案内で別府でのまちづくりのノウハウを学ばせていただきました。また、私たちの取り組みについても意見交換させていただきました。別府では入浴ではなく、観覧を主な目的とした温泉は地獄と呼ばれており、なんと「別府地獄組合」という看板も発見。地域の資源をこんな風に面白がって観光客を呼び込む手法は、復興に向けて被災地が学べることだと思います。翌日は、大分市に移動して減災を目指すNPOネット意見交換会に参加。3県の連携復興

佐藤 加奈絵(サトウ カナエ)

勤務地:多賀城市市民活動サポートセンター

はじめまして、この春、宮城大学を卒業し、多賀サポで勤務することになりました、佐藤加奈絵です。大学ではまちづくりをはじめ、SB・CBの分野を学んできました。これから多賀サポで地域の人たちと関係を深めながら、地域に根差して多賀城を盛り上げていけたらと思っています。これからどうぞよろしくお願いいたします。

センターが取り組んで来たこの3年間の活動報告を行いました。引き続き、減災とはについて、大分の方々と一緒に考える機会をいただきました。被災地で、復興に向けて考えることはあっても、減災につながる視点はまだまだ少ないなと思いました。28日は、倉敷の方々と意見交換の場をいただきました。

この3日間の意見交換の場には、多くの被災地支援に関わった方々がおいでになっていました。そこで気が付いたことは、「支援した被災地は、今どうなっているのか」という情報が届いていないということ。今回は被災地に支援を下された方たちにお礼と報告を兼ねてのキャラバンでしたが、改めて、今の被災地の状況をわたしたちはもっと発信しなければと思いました。それは、それぞれができる方法で届けていくことだと思います。というわけで、このニューズレターもお世話になった皆さんにお送りしたいと思います。

活動やニーズ、「志」でつながろう。

ライブラリ



毎号「みやぎNPO情報ライブラリ」
登録団体の中から、ひとつをご紹介します。

特定非営利活動法人

今回は

まなびのたねネットワーク

<http://fields.canpan.info/organization/detail/1891484865>

代表理事の伊勢みゆきさんにお話を伺いました。

活動内容

「まなびのたねネットワーク」(以下、まなたね)は、宮城県内外にてキャリア教育(宮城県志教育・仙台自分づくり教育)を中心とした教育支援活動を行っています。主体的に動ける人を育てるためにはどうすればよいかを常に考えながら、年齢や対象に応じたプログラムを作成し、環境、防災、国際理解、ESD(持続可能な開発のための教育)など、様々な切り口から子ども達へはたらきかけています。



代表の伊勢さん

現在の活動での、注目ポイント

■キャリア教育を通した自分軸づくり

小・中・高と教育現場のニーズに応じた様々な教育支援を行っておりますが、まなたねが特に力を入れているのは、自分に気づき、友達との関係性を築くワークショップ型の学び合い授業です。多感な時期の子ども達が自分軸を作っていくためには、まず心を開いてキャッチ能力を高める必要があります。そのため授業では、「どのような人生を歩みたいか」「どのようなことをやりたいか」について考える時間を設け、自分自身と向き合ってください。こうして子どもたちの中から出た「気づき」を、クラスみんなで共有し合います。身近な友達と認め合うことによって自己肯定観が高まり、心の成長につながるのです。このように、まなたねのキャリア教育は、人としてのベースづくりを大切に、子ども達が生きる力を育めるよう進めています。

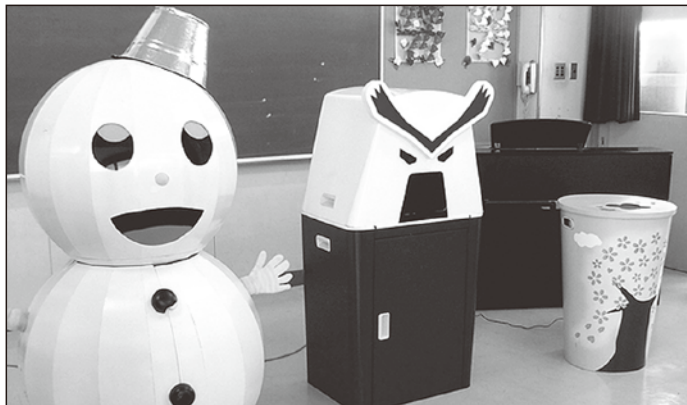
■みやぎNPO情報ライブラリとは

「NPO情報ライブラリ」は、NPO・市民活動団体の皆さんから活動に関する情報をお預かりして、地域の市民・企業など社会一般に広く公開・発信する情報発信支援事業です。

■価値観や生き方のヒントを見つけるお手伝い

学校で学んでいることが社会で生かされていることを子ども達に実感してもらうように、地元の企業や行政、地域の人々を巻き込んで、様々なプロジェクトにも関わっています。例えば、昨夏、石巻市内小学校において企業が主催した『夢のゴミ箱プロジェクト』の授業では、子ども達が地域課題解決方法として提案した「四季折々のゴミ箱」が全国優秀賞に輝きました。子ども達の思いを形にするため、まなたねが宮城県や企業をつなぎ、多くの方の協力を得て製品化を成し遂げたのです。子ども達に想いや夢は必ず実現することを、授業を通して伝えています。

活動をはじめて間もない頃にキャリア教育を実施した子どもたちが、現在、高校生や大学生になり、「小学校5、6年生で受けたことに意味があった」「目的意識や問題意識を持って行動できている」と自己評価の声を返してきています。蒔かれた「まなびの種」は、5年、10年の歳月を経て、芯のしっかりした芽として確実に芽生えているのです。



子どもたちが提案した「四季折々のゴミ箱」

読者のみなさんへのメッセージ

今、教育の現場では、子ども達のより豊かな学びのため、支える地域人材、協力者、学校と地域を繋ぐ教育コーディネーターが必要です。復興後の宮城を支えていく子どもたちを育てるために、それぞれの立場で、それぞれのできるかたちで活動に関わっていただけたら嬉しいです。

お問い合わせ

特定非営利活動法人
まなびのたねネットワーク事務局

電話/FAX: 022-707-0122
E-mail: info@manabinotane.net

(大町事務局 西川日和)

サポート・ご協力 ありがとうございます

■平成25年度会員(敬称略・順不同、2014年2月1日～3月31日)

(正会員)(特)あかねグループ (準会員)今野清子

■企業・団体協力(50音順、敬称略) 富士ゼロックス宮城(株)(カラーコピー機を社会貢献価格にて)

ご寄附ありがとうございます

■東日本大震災救済・復興支援活動のための寄付総額(2014年3月末)

プロペラ募金へのご寄付(当センターが行う復興支援活動を応援する寄付)……………240件 24,218,556円

住友商事 東日本再生 ユースチャレンジ・プログラム —インターンシップ奨励プログラム—

3年目を迎える今年は、宮城、福島、岩手の3県そろっての開催となります。何かにチャレンジしたい、復興のまちづくりに携わりたい、自分を変えたい!など、前向きな若者の長期インターンシップへのご応募をお待ちしております。

受入対象団体(宮城県／7団体)

(特活)アスイク、(特活)石巻スポーツ振興サポートセンター、
(特活)Switch、(一社)ぶれいん・ゆに〜くす、
(特活)冒険あそび場—せんだい・みやぎネットワーク、
(特活)杜の伝言板ゆるる、(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

応募書類受付期間:

4月26日(土)～5月15日(木)【当日必着】

主催:住友商事株式会社

企画・運営協力:

特定非営利活動法人市民社会創造ファンド

お問合せ先:

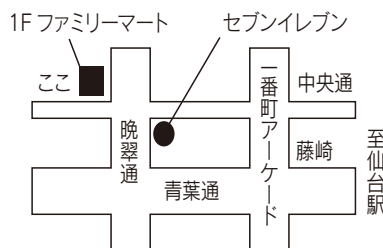
特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター
インターンシップ奨励プログラム宮城事務局
(担当:小川)

連絡先

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎ NPO センター
〒980-0804 仙台市青葉区大町 2-6-27 岡元ビル 7F
TEL : 022-264-1281 FAX : 022-264-1209
E-mail : minmin@minmin.org HP : <http://www.minmin.org/>

発行:(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

代表理事 大滝精一
紅邑晶子
編集部:伊藤浩子 西川日和
発行日:2014年5月1日
デザイン:氏家朗



岡元ビル 7F 仙台駅から徒歩 20～25 分

編 | 集 | 後 | 記 |

ようやく東北も春の陽気になりました。新年度になり、当センターとお付き合いのある自治体も担当者が変わり、人も組織も新たな未来に向けて始動しています。当センターでも5名のスタッフが入りました。仙台サポセン、多賀城サポセンの窓口でご挨拶させていただきますので、ぜひ宜しくお願いします。新しいメンバーとともに、次のステージへ向けて新しいチャレンジを行っていきます。(伊藤浩子)

今月号「NLみんな」を担当させていただきました西川日和(にしかわひより)です。これまでも当センター指定管理の施設において情報誌の編集に関わってまいりましたが、今回、本部事務局において編集業務に関わらせていただき、場所が変われば趣旨や対象が変わる情報誌の編集・構成の難しさと、紙媒体で発信することの意義や必要性を改めて考えさせられました。関係者の皆様にはたくさんのご協力をいただき、感謝しております。この場を借りて、御礼申し上げます。(西川日和)